# Retro-Future

## 古くて新しい　もうひとつのビンテージオーディオ

**ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。**

### 第15回 Wharfedale

Wharfedaleは1932年、ギルバート・A・ブリックスによってイギリスのヨークシャー州で設立され、英国ではGoodmans 社と共にもっとも古いスピーカーメーカーとして欧米では有名。また、彼は音響学者として1948年にスピーカーの設計理論書を書き上げていたり、スタインウエイ使いの名ピアニストであったことも知られている。1950年にはロンドンのフェスティバルホールでブリッグスは、試聴者の目の前でオーケストラと自社スピーカーの聴き比べを行い、とても高い評価を得ている。日本では20㎝、30㎝口径のフルレンジユニットが良く知られているが、古い年代のシステムはほとんど紹介されていない。

**SFB/3 60年代**
写真のモデルは60年代になってからデザインされた珍しい家具調タイプ。ユニットの種類とネットワーク構成は初期型と同じとなっている。サランネットが布製に変更になった以外はバッフルの大きさ、フロントのバッフルの厚みや上向きに取り付けられたtweeterの位置、W12とW10の取り付け位置もほとんど初期型と変わっていない。市場価格は95～120万円。サイズは89W×31D×78Hcm

本文／**田中伊佐資**
製品解説／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）
撮影／小林幹彦（彩虹舎）

# 情念がこもった濃密な歌声 まさにミッドレンジ大賞だ

いつものようにカメラマンが先行して撮影を始めている「アトリエJe-tee」へのり込むと、静電型らしきスピーカーが置いてあった。「おっクォードですね」とモノ知り顔で発言しようとしたら、店主の岡田さんが「珍しいでしょう。ワーフデールなんです」と先に切り出してくれてハジをかかずにすんだ。金属パネルのモデルを見てそう勘違いしたのだが、わきには撮影を終えたユニットがあり、確かにほかは箱の形になっている。

「日本では英国のスピーカーといえばタンノイというイメージですけど、ヨーロッパではワーフデールとグッドマンが業界を引っ張ってきたんです。デザインが異なる3種類のSFB（左ページの解説参照）が揃うことはもうありえないでしょう」と岡田さんは説明してくれた。

もっともデラックスな、その名もズバリ「DELUXE」というモデルをつぶさに眺めてみると、ウーファーが30㎝、スコーカーが25㎝と非常に似た口径であることが僕には考えにくい。考えにくいじゃすまないのが、両ユニットとも帯域をネットワークでカットしていない「鳴り放題」状態であること。低域がかぶりあったりしないのか。

5㎝径のトゥイーターはずっしりと重く、ピース缶ほどのボディのなかに大きなマグネットが詰め込まれているようである。なんとこれが上向き方向で天板につく。現在ならともかく、はるか50年以上も前に、豊かな音場を得ようとしていたということだ。

ナット・キング・コールの歌声から始めると、情念がこもった濃密なミッドレンジにのけぞった。「うっ」と本当に声を漏らしてしまった。これはもうまさにミッドレンジ大賞だ。この音はいまのスピーカーでは出ない。ウーファーとスコーカーは帯域的にはもちろん広く重なっているけれど、エンクロージャーの後面を開放して、混濁させないようなチューニングをしているのだろう。もしネットワークできれいに分割したら、つまらない音になるにちがいない。

優れた技術を持っているワーフデールだが、最後の最後は技術者のトータルな感覚で完成させたように思った。

ちなみアンプはこれも珍しいロンドンRCA。英国コンビとなると僕が聴きたいのはビートルズ。その思い入れを差し引いても、ジョン・レノンの声に、厚みや張り出しだけじゃなくウェットな陰影感が出ている。ビートルズ・オーディオにはこれがとても重要。

声がよければもちろんアート・ペッパーのサックスもいい。最後にかかったロッシーニの弦楽曲も低い重心を維持して弦がスピーカーの背後にブワッと広がった。ここでようやく、後ろだけでなく上空にも音を、ということでトゥイーターを仰向けにした意味がわかったのだった。

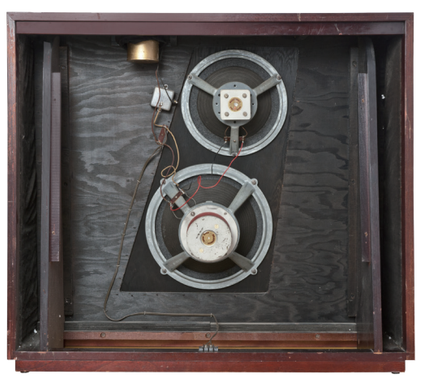
**SFB/3 Dluxe**

**SFB/3**
SFBは Sand Field Baffule 3way system の略で砂をサンドイッチしたフロントバッフルと左右のステイのみで構成された後面開放型の同社フラッグシップモデル。右の初期モデルは50年代に開発されている。また左の SFB/3 Deluxe と名付けられた豪華な家具調モデルも当時は存在していた。ユニットは30cmの W12 woofer、25cmの W10 midrange unit、7cm のsuper3 tweeter からなる3Wayシステムで、全て紙タイプの振動板を持つユニットが搭載されている。ネットワークは採用されてなくwooferとmidrange は全帯域駆動、tweeter のみ4μのコンデンサーで低域がカットされている。後面開放型システムを採用しているため、箱による音の濁りや影響がなく、このバッフルの前後と上方向に広がる音場空間表現からはこの会社の実力の高さがうかがえる。

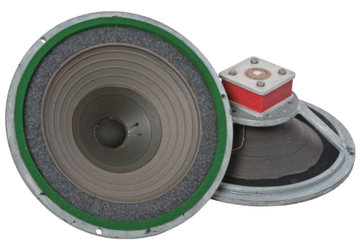
**SFB/3 初期モデル**

**super 3 tweeter**
7cm口径の紙の振動板に小さな握りこぶしほどあるマグネットを持つトゥイーターで、ダンパーを持たないフェルトのエッジのみで振動板が固定されている。とても滑らかで高解像力のユニットであるが、ダンパーを持たないため、安定動作のために上向き方向での設置が必要となる

**W12 woofer**
紙の振動板を持つ30cm口径のユニットで布タイプのエッジが採用されている。低域音は豊かで厚みがあるが、高域音もボイスコイルが他のウーファーと比べるとかなり小さいため、上の帯域まで特性が伸びていてフルレンジユニットに近い特性を持っている



SFB/3 Deluxeの背面部。super 3 tweeterが上向きに設置されているのが特徴的である



**W10 midrange**
このサイズのユニットとしては極めて小さいボイスコイル口径と紙の振動板にフェルトタイプのエッジを持つ25cm口径のユニットで、その再生音はこのシステムから繰り出される音のかなりの部分を支配していると思えるほどの表現力がある

取材協力：アトリエJe-tee　〒153-0064　東京都目黒区下目黒3-24-14＃701　☎03-3715-5336　ホームページ：http://www.je-tee.com

# Retro-Future

## 古くて新しい　もうひとつのビンテージオーディオ

**ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。**

第16回

## Wharfedale

（1950年代後期）

今回紹介する2機種は50年代の後期に独創的な設計思想で開発されたバスレフ箱タイプのW-3とW-4システム。両者は前回紹介したFSB ／ 3システムと同様に、すべてのユニットの振動板が同じ紙素材で統一された3wayシステムとなっている。この2つのシステムはミッドレンジに同じ12cmのコーン型ユニットが搭載され、ネットワークは大型のオイルコンデンサーとコイルで構成されている。同社は開発当初からコンシューマーでの音楽再生を前提としていて、一般的な広さでの臨場感あふれる自然で滑らかな再生音のクオリティの高さは、この同年代に開発されていた他の英国製スピーカと比べても1歩進んでいたように感じられる。

### W-3

1950年代の後期に少量のみ生産されたブックシェルフ型の3wayシステム。正面の上部と下部分が斜めにカットされたデザインの箱で丸いダクトのバスレフポートが装備されている。ユニットは30cmウーファー、12cmのコーン型ミッドレンジ、5cmのコーン型トゥイーターの構成で、大きなオイルコンデンサーとコイルが使われているネットワークでコントロールされている。ブックシェルフタイプだが、縦置きセッティングを前提としているようなユニットレイアウトになっていて、ウーファーの箱は独立していてユニットはそのほぼ正面に取り付けられているが、ミッドレンジとトゥイーターはそのウーファーキャビネットの外側の上に載せられるような構造で正面上部に斜め上向きに固定されている。その小さい外観からは想像もできないほどスケール感に富み、また表現力に富む中音域の魅力にも納得させられてしまう。

本文／**田中伊佐資**
製品解説／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）
撮影／小林幹彦（彩虹舎）

# あらゆる音楽に対して無敵じゃないかと思う

前回に続いて本日もワーフデール。大小2種が「アトリエ　Je-tee」に揃っていた。

小型のW3はブックシェルフとフロア型の中間ぐらいの大きさだ。スピーカーとして存在感を主張しつつも、これなら誰とは言わないが家庭内の非理解者に受け入れてもらえるだろう。このサイズのスピーカーは、新製品マーケットではかつていっぱいあったのに、どんどん減ってきている。特に普及価格帯はブックシェルとトールボーイだらけになってしまった。ちょっと寂しい。

W3はヴィンテージのギター・アンプのような顔立ちで、そこがとても人なつっこい。30㎝ウーファーは下部の別箱になっていて、大型マグネット入りトゥイーターとスコーカーは角度を変えて斜め上を見るようにマウントしている。だから頭部にもサランネットが貼ってある。どことなく愛着のわく容姿だ。

シナトラの「エンジェル・アイズ」。音楽のスケールがでかい。大型スピーカーを感じさせる。中高域の上方への放射がそうさせるとみた。

声はいまどきスピーカーの確固とした定位ではないが、ひとつの雰囲気がある。この雰囲気が尊い。ライヴ会場に行って、高解像度・ピンポイント定位なんてこれぽっちも考えないのに、なぜオーディオに向かうと意識がそこにいくのだろう。書き手や雑誌が、そこばかりを突けば、メーカーはこんな遊び心や情緒のあるスピーカーを作れっこない。なんだかいろいろ考えてしまった。

ロッシーニの「弦楽のためのソナタ集」は古い英国スピーカー独特の翳りや潤いをそれほど強くアピールせず、しっかりとタイトに聴かせる。よく枯れた堅めのエンクロージャーが作用しているように思った。

W3の上位のW4はスコーカーが2つに増えて左右に付いている。ウーファーとスコーカー&トゥイーターが別室方式は同じ。W4は5年に1回のW3と一緒に巡り会えたのは幸運だった。

そのまま同じロッシーニを聴くと深みと重みが加わっている。スリットになったバスレフ・ポートが背中についていて、壁（コーナー）につけるともっと雄大に鳴るはずだ。部屋の中央にセットされているけど、とてもいい感じに音が広がっている。シナトラも大物然とした態度で歌い上げてくる。シナトラがシナトラらしくそこにちゃんと立てば、あらゆる音楽に対して無敵じゃないかと思ってしまう。そんな説得力がある。

80年代ポップスの傑作、スイング・アウト・シスターの「ブレイクアウト」であら探しを試みたら、エレクトリックなビートも苦にしていない。これは本当に50年代半ばの製品なのかと勘ぐりたくなった。

### W-4後面バッフル側

ウーファーキャビネットの後部バッフルには複数のスリット状のバスレフポート、その上には中高域の2つのアッテネーター、そしてその両サイドには中高域の音場拡散用の小窓があり、その下には持ち運び用の取っ手が付いている

### W-4 Airdale

通称“エアデール”と呼ばれているシステムで、1950年代後期から70年代の中期頃まで外観はほぼ同じながら、ユニット構成を変えながら生産されたロングセラーシステム。上から見ると6角形の箱のユニークなデザインでウーファーのみ後ろが複数のスリットになったバスレフキャビネットに装着され、その上の部分の隔離されたスペースにミッドレンジとトゥイーターが装備された斬新な構造だった。初期のシステムは30cmウーファーに12cmのミッドレンジが2つ正面の左右に振り分けられて装着され、5cmのトゥイーターは真上に向けて装着されている。その後ユニット構成は3wayと同じでも、少しユニットの種類が入れ替わりながらモデルチェンジが何度かあり、後期になるとウーファーが38cm、ミッドレンジは20cmに変更になり、そのミッドレンジ用ユニットはトゥイーターの横に上向きで装着されるようになった。W-3とほぼ同じようなユニットを装備しているが、大型システムに負けないくらいの迫力とスケール感のあるサウンドが再生される。

### W-4 Airdaleの内部写真

ウーファーボックスの上の独立したスペースがもうけられていて、4方向に小窓でオープンエアーになっている。木の台座に真上向きの搭載されたSuper3 トゥイーター、その奥にW5 ミッドレンジユニットが正面横に設置されているのが確認できる

### W12 / W5 / SUPER 3

ユニット構成はW12（30cmウーファー）、W5（12cmコーン型ミッドレンジ）、Super3（5cmコーン型トゥイーター）となる。特にW-5ミッドレンジユニットはこの2機種のために開発されたもの

### W-3の内部写真

W5ミッドレンジユニットが15度ほど後ろに傾斜した正面のバッフルに、またSuper3 トゥイーターは斜め前方向に傾斜した内部天板の上に設置されているのが確認できる



取材協力：アトリエJe-tee　〒153-0064　東京都目黒区下目黒3-24-14＃701　☎03-3715-5336　ホームページ：http://www.je-tee.com

# Retro-Future

## 古くて新しい　もうひとつのヴィンテージオーディオ

**ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今回は英国Wharfedale社の最高峰「Airdale」の後期型モデルを紹介していこう。**

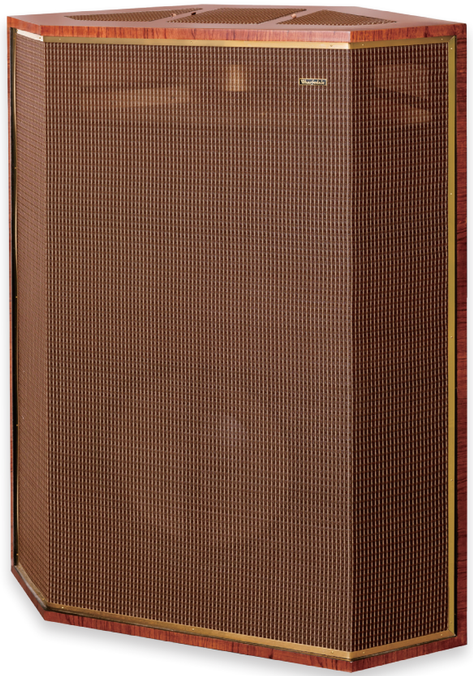
## 第38回　Wharfedale／W-4 Airdale

**Wharfedale**　Wharfedale 社は1932年にギルバート・A・ブリッグスによってイギリスのヨークシャー州に設立された。英国では Goodmans 社とともに最も古いスピーカーメーカである。彼は音響学者としても1948年にスピーカー設計の理論書を書き上げていたり、スタインウェイ使いの名ピアニストとしても知られていました。1950年にはロンドンのフェスティバルホールで試聴者の目前でオーケストラと自社のスピーカーの聴き比べを行い、とても高い評価を得ている。日本ではSuper-8や12といったフルレンジスピーカーがよく知られているが、システムとしてははほとんど紹介されていない。

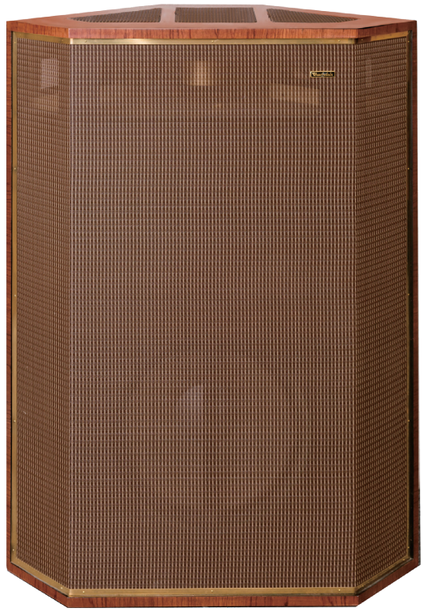
本文／**林 正儀**　　製品解説／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）　撮影／小林幹彦（彩虹舎）

### W-4 Airdale　後期型

以前このページでも紹介した同社のフラッグシップモデル「エアデール」の後期型。音場型のスピーカーシステムで、キャビネット後部にスリットタイプのバスレフポートが複数あり、部屋のコーナーにセッテイングすることで、より臨場感のあるサウンドが聴ける。前期型よりもキャビネットが全体的にひとまわり大きくなっていて、外観やキャビネット構造は同じながらユニット構成が変更されている、トゥイーターはどちらも同じタイプで上向き。前期型は2個の10cmミッドレンジが左右に分かれて前方に向けて搭載されていたが、後期型はより大きな 20cm を1個に変更され、トゥイーター同様に上向きに搭載されている。ウーファーも30cmから38cmと大型になり、より豊かな低音再生を可能にしている



キャビネット後側の上部にトゥイーターとミッドレンジ用のアティネーターのツマミが搭載されており、その両サイドにも四角いポートが開けられている。スリットタイプのバスレフポートは、コーナーにセットすると壁と本体の隙間から壁を反射して低音が部屋に放出される仕組み



キャビネット上部の前3面には四角いポートがあり、こちらからもユニット後部からの音が放出される。38cmに変更されたウーファーユニットはキャビネットのかなり下部に搭載されている。また、写真では見えないが、本体にはキャスターが装備されている。サイズは650W×340D×1,010H㎜





# 降りそそぐ空気感が心地いい エアデールの魔法にかかった

エアデールは僕の憧れだ。そもそもワーフデール（1932年の創立）というブランドは、タンノイやJBLとはひと味違う斬新な構成の音場型スピーカーで一世を風靡。当時、スーパー8というフルレンジユニットしか買えなかった学生の身には眩し過ぎる存在だった。

そういえば菅野沖彦さんが「コーナー型として設計された3ウェイシステム・エアデールを左右に4本ずつ、マランツ7T＋モデル15で鳴らす夢のコンビネーション」としてシステム提案をしていた。海外ではありえない奇抜さだが、上向きにセットされた中・高域のユニットが360度に拡散される理屈を思えば、なんだか納得してしまう。

今回対面したのは1960年代の後期型（ステレオ時代）だ。嬉しくなるほどいいねいにレストアされていて、金色のフレームやトップに設けた新感覚のサランネット（メンテのため着脱可能）など、デザイン的にカッコいいと思う。もう60年近く昔のものだし、いくらオリジナルがいいといっても限度がある。

「一回こうしてきれいにすればお客さんが大事にしてくれますから」

ビンテージに対する考え方を岡田さんに教えられた感じである。リークの真空管セパレートアンプに灯がともり、さすがに15インチウーファーらしい、コシの座った堂々たる低音域だ。紙のコーンで3ウェイを構成している狙い通り、エネルギーバランス的にも音色的にも大変スムーズで、切れ目なくサウンドが流れてゆく。いやいやオーディオを忘れ、ここは好きなジャズ、クラシックやロックで音楽に浸りきる時間を過ごしたいものだ。ひとときではあるが……。

いきなりレイ・チャールズ＋ナタリー・コールで濃いジャズに引き込まれる。太いダミ声のいがらっぽさや（咳き込みそう）、パワフルで妖艶な表情がベリーグッド。オスカー・ピーターソンは「コルコバード」の軽快なボッサについ体が動いたりして。2管の強靱なスーパーレイに圧倒されるのがマンハッタン・ジャズ・クインテットだ。聴覚につき刺さるサックスブロウ。デビッド・マシューズの絶妙なピアノがたまらんゾ。ブルーノート東京の熱いライヴを思い出していた。

筆者はもともとクラシック一辺倒だったから「アイネ・クライネ・ナハトム・ジーク」なんて耳タコ……。のはずが、鳴りっぷりが良い。馨しくそしてくっきりとヌケ出す艶のある弦。そのみずみずしい重なりといい、上から降りそそぐ空気感も心地よく、エアデールの魔法にかかった感じである。ビートルズもスティングもナイスマッチで大拍手ものだ。

これでペアで95万円なら、財布の紐が緩みそうである。部屋の余裕さえあればだが、憧れの銘機を迎えられたら嬉しい。

アッテネーターの板を外すと強力なマグネットを持つトゥイーター、ミッドレンジユニット、大型のコイルとオイルコンデンサーで構成されたネットワークが確認できる

上から見ると六角形になっていてユニットの正面が確認できる。トゥイーター、ミッドレンジはどちらも紙製の振動板である。また、この後期型はトゥイーターのセンターキャップがアルミに変更されており、より高域の繊細な表現が可能になっている

サランネットの右上に配置されたブランドのロゴ



取材協力：アトリエJe-tee　〒153-0064　東京都目黒区下目黒3-24-14＃701　☎03-3715-5336　ホームページ：http://www.je-tee.com